思文閣出版
1,995円（税込）

マイナーなればこそ
新島襄を語る（九）

本井康博（大学神学部教授）著

本書は「新島ワールド」の案内人を自負する著者が挑戦してきたシリーズ「新島襄を語る」の第9巻である。全巻完結を前に「新島ワールド」の真髄に一層迫る。また、織り込まれた「写真」、「コラム」、「ことば」も新島ゆかりの世界へと読者を誘う。

本書のタイトルとして、『第二の維新』との新島の言葉が早くから予定されていた。「勝ち組」の歴史である明治維新に対抗し、「負け組」の精神への期待を込めたものであった。しかし、昨今の社会状況（「大阪維新の会」の出現や大河ドラマ「八重の桜」の計画）に鑑み、『マイナー』との表記が採用された。「新島ワールド」の本質を社会の中心から疎外され切り捨てられた「敗者（マイナー）」との連帯の中に読み解いていく著者の深い洞察力と識見に感銘を受ける。

P．リクールに言及するまでもなく、「語り／パロール」は語り手や聴き手の意図を越えて働き、両者の固定的な関係を打破する。語り口調に徹した本書は、講演者と聴衆との協働作業（collaboration）を通し、新島の真理（他者の痛みに寄り添う歩み）へと読者を縦横無尽に案内する。新島の具体的な足跡（宗教教育、私学教育、女子教育、社会福祉の実践等）の描写を通し、「敢為の精神」を明示する。それは聖書の世界へ通底する弱さや小ささへの関心であり、人間の合理性からの脱落により拓かれる真理への招きである。

閉塞的な時代状況に一条の光を放つ本書により、読者は新たな希望へと拓かれる。

小崎眞（女子大学生活科学部准教授）

学術出版会
2,940円（税込）

近代旅行記の中のイタリア

真銅正宏（大学文学部教授）著

本書は、明治から昭和の終戦までの日本人旅行者たちのイタリア体験を、紀行文や日記の記述から総合的に探究したものである。

ずっとイタリアは気になる国だった。パリやロンドン、ベルリンを訪れた日本人の足跡は多くが滞在者としてのものだが、イタリアでは訪問の仕方がどこか違う。また、パリやロンドンとは違い、イタリアにおいては、ローマだけが首都として特権化されるのではなく、ミラノやナポリなど諸都市それぞれにも同等の異なる魅力がある。

研究のきっかけは、イタリア東方学研究所のシルヴィオ・ヴィータ先生が、教え子のジュセッペ・ジョルダーノ君を大学院生として受け入れて欲しいとの依頼に来られたことにあった。ここから、私のイタリア熱が急激に高まった。科学研究費補助金の採択が決まったことも、研究を促進させた。

イタリアには、ジュセッペの結婚式も含め、毎年のように出かけた。Aistugiaという伊日研究学会のナポリ大会で、基調講演も依頼された。本書は、これらすべてのイタリア体験の成果でもある。

国文学科で日本近現代文学を専攻する私がなぜイタリア研究なのか、とよく聞かれるが、日本の近代化の形を見据える一つの視座として、西洋の文化移入のタイプ別の考察を行う際、イタリアは一つの特異な形を示すから、と説明することにしている。実は他にも、食の魅力を始め、たくさんの個人的な理由はあるのだが。

著者より

東信堂
3,360円（税込）

学士課程教育の質保証へむけて

山田礼子（大学社会学部教授）著

日本の大学の近年の変容は著しい。大学改革が大きな課題として取り上げられはじめた2000年代初頭からみると、現在の高等教育全体の姿はかなり異なっている。今や大学改革といえば教育改革を示唆するといえるほど、教育面を意識した改革を進めている。

教育の改善を意識した大学改革の背景には、グローバル化した知識基盤社会のもとでの世界的な科学技術の進展と競争を所与のものとし、それに日本社会や日本の高等教育がどう対処していくべきか、そのために、いかに組織や既存の教育課程を変革していくのかが、政策や個々の大学の方向性として確認されたことがある。同時に、こうした動向は日本を含めた多くの国々にとっての共通事項として認識されていることも現在の特徴であろう。言い換えれば、教育の質保証が日本のみならず世界の高等教育の大きな課題となっている。

本書は、こうした現状において、大学はどのように教育改革を進め、教育課程がいかに学生の成長に交差し、学習成果につながるのかを問題意識として取り上げ、現代社会が要求する〝保証されるべき教育の質〟とは何か、また教育成果としての学生の質向上は、具体的にどう測られるのかについて、筆者がこの10年間に主に研究課題としてきた初年次教育の効果、大学教育の成果を中心に実証的な学生調査データを用いて分析し、論じている。現代大学教育の焦点的課題を取り扱っている本書は、研究者のみならず多くの高等教育関係者にも参考となるものである。

著者より

中公新書
924円（税込）

レーガン
―いかにして「アメリカの偶像」となったか

村田晃嗣（大学法学部教授）著

リーダーの不在やリーダーシップの欠如が頻繁に語られるようになってから、久しくなった。そうした中で、2011年にアメリカの第40代大統領ロナルド・レーガンの生誕100周年を迎えた。今やレーガンはアメリカ人の間で「最も偉大な大統領」や、果ては「最も偉大なアメリカ人」に選ばれるほどの人気である。

レーガンはいかにして「アメリカの偶像」となったのか？副題に示したように、これが本書執筆の最大の動機である。また、レーガンがアメリカを統治した1980年代は日本の経済力が頂点に達した時期であり、筆者の青春時代でもあった。筆者にとって、今出川キャンパスでの思い出とレーガン時代は、密接に結びついている。この80年代の時代状況を理解することも、執筆の重要な動機であった。

筆を進めるにつれて、レーガンが20世紀アメリカの政治のみならず大衆文化やマスメディアを見事に体現していることを痛感した。政治と文化、特に政治と映画は、筆者の新たな研究テーマである。

本書執筆最中の2011年3月11日に、日本は東日本大震災を経験した。今ほど日本がリーダーを必要とする時はあるまい。かつて、ナポレオン・ボナパルトは「リーダーとは希望を商いする人である」と述べた。日本からリーダーが姿を消した頃、この国から希望も失せたのではなかろうか。レーガンを通してリーダーについて考察することは、希望を思索することでもある。この思索の旅はまだまだ続く。

著者より

岩波書店
2,730円（税込）

三商大 東京・大阪・神戸
―日本のビジネス教育の源流

橘木俊詔（たちばなきとしあき）（大学経済学部特別客員教授）著

筆者は過去に日本の高等教育を論じる際に、いくつかの大学を例として取り上げた。早慶両大学、東京大学、京都三大学（京大、同志社、立命館）、女子教育（お茶の水女子大など）である。本書はその一環の流れとして、商業教育を論じたものである。具体的には旧制の時代に三商大、三大高商と呼ばれた名門校の歴史を振り返って日本のビジネスマン教育を評価したのである。

三商大とは東京（現一橋大）、大阪（現大阪市大）、神戸（現神戸大）であり、三大高商とは長崎（現長崎大）、小樽（現小樽商大）、横浜（現横浜国大）である。明治時代にあっては富国強兵・殖産興業が謳われたが、国を強くするには官僚、軍人、技術者、医師の養成をもっとも重視したので、法学、工学、医学などが重宝され、商業教育は軽視された。江戸時代における「士農工商」の商人の身分序列を思い起こせば、その源流を理解できよう。

しかし大正・昭和時代に入ると日本経済の発展が進行し、営業、管理といったいわゆる事務系サラリーマンの重要性が認識されるようになった。やっと商業教育が市民権を得るようになり、商科大学や高等商業専門学校が多く設立された。本書はその歴史過程と現在を詳細に迫った。

日本のビジネス教育のみならず、先進諸国ではこれにどう取組んできたか、ビジネススクールを例として議論した。日本ではビジネススクールはまだ定着していないが、今後それがどうなるかを予想してみた。

著者より

ミネルヴァ書房
3,675円（税込）

京都・観光文化への招待

井口貢（いぐちみつぐ）（大学政策学部教授）、池上惇編著

本書は、本誌前号の「新刊紹介」のコーナーで掲載いただいた拙編著『観光文化と地元学』（古今書院）の姉妹版・京都編といってもよい性格をもつ。

文化政策学の視点を基本に据えながら、風雪に耐え蓄積され継承されてきた常在の京都文化を、一定不易なる存在と捉えながら、一方で容認し得る変容が新たな文化創造に導いてくれることを確認している。いわば「変わらずに変わること」を真骨頂とした京都論であるといっておこう。そして「観光」を銘打つうえでさらにいえば、目論みとしての京都観光の手引書ではこれはなく（例えば、いかようにすれば年間入込観光客数5千万人が維持できるだろうかとかいったノウハウや知識を開陳する具合の…）、より住みよい暮らしを希求してきた、京に住まう人々の、目的としての京の文化と知恵による、結果としての観光を考えるための導きの書でありたいと念じた。もちろんそれは、京都以外のまちに住む人たちにも何らかの啓示となるはずである。

ちなみに本書が出来上がるにあたって、京都を愛しこのまちに暮らし活躍される同志社人の皆さんの力を共著者としてお借りしたことを以下に付記しておきたい。

堤勇二氏【第一章：京都観光の魅力（文学部卒）】、小島冨佐江氏【第六章：京町家と暮らし（文学部卒）】、一澤信三郎氏【第七章：地域ブランドとしての生活雑貨（経済学部卒）】、東義久氏【第九章：学生のまちの音楽空間と物語性（法学部卒）】、上田誠氏【第十章：京都観光の現状（総合政策科学研究科修了）】

著者より

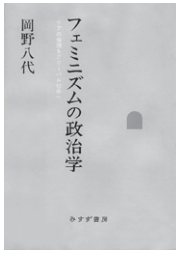
ミネルヴァ書房
3,675円（税込）

政策評価

山谷清志（やまやきよし）（大学政策学部教授）著

政府のアカウンタビリティを政策評価によって追及すること、これをテーマに修士論文を書いたのが1982年。研究者になった後の1995年、新設された同志社大学総合政策科学研究科ではじめて政策評価の講義を担当したが（非常勤）、その講義ノートをもとに書き上げた本が『政策評価の理論とその展開―政府のアカウンタビリティ―』（1997年）で、たまたま通産省や三重県で政策評価が始まり、中央省庁改革でも導入が決まっていたので少し注目されたが、実は悩んでいた。自分の研究が「机上の空論」で「畳の上の水練」だったからである。旧総務庁行政監察局をはじめとする官公庁の政策評価研究会、外部有識者会議等に参加していたが、実際にやってみないと分からない。そんな時、外務省からODA政策の評価をやらないかと申し出があり、幸運なチャンスに飛びついた。ODA評価、政策評価と独立行政法人評価を「昆虫学者がジャングルに行く」ように楽しんだが、その経験をふまえて書いたのが『政策評価の実践とその課題―アカウンタビリティのジレンマ―』（2006年）だった。ただしこれは難解でマニアックだったので、その反省に立ち『政策評価』を刊行した。こうして3冊の本は刊行順序が逆になったのである。したがって、この『政策評価』から読んでいただくと、政策評価の全体像をご理解いただけると思う。残るはアカウンタビリティ研究だが、58歳の今、「少年老い易く学成り難し」で相当焦っている。

著者より



みすず書房
4,410円（税込）

フェミニズムの政治学
―ケアの倫理からグローバル社会へ

岡野八代（おかのやよ）（大学グローバル・スタディーズ研究科教授）著

わたしは、前著『シティズンシップの政治学』を、2003年合衆国で脱稿しました。政治思想的に最も古い政治概念である「シティズン」を包摂の理念として鍛え直しながら、戦時体制下のニューヨークでの滞在で、国家暴力と向き合うことなき政治理論には、重大な欠落があるとしか思えなくなっていました。

前著のそうした反省の中から、新著の構想が生まれました。包摂よりも排除の契機に、より重点を置きながら、市民の諸権利を保障し、平等に自由であることを担保するはずの近代国民国家はなぜ、これほどまでに暴力的なのかを論じること、それが本書の目的でした。

第一部では、リベラリズムの議論から母の痕跡が綺麗に消去されている点に注目しました。他者への依存を否定する「忘却の政治」と名づけたその力学がもつ暴力性を明らかにしました。

第二部は、「ケアの倫理」からの社会構想の可能性を論じています。傷つきやすい者を守るという原理を出発点に、言葉の要らない共同体と考えられてきた「家族」を、むしろ、言葉さえ通じない、異なる者が集う、偶然の場として再定義しました。

第三部は、第一部で批判したリベラルな主体こそが、暴力装置である主権国家の論理で構成されてきたことを明らかにし、ケアの倫理は、グローバルな平和構築にふさわしいと論じました。

多くの反省点はあるものの、本書は、フェミニズムの視点から政治理論・思想を論じた日本で初めての書物であると自負しています。

著者より

慈学社出版
8,820円（税込）

地方公共団体と自主課税権
―自主課税権の法的限界と地方税改革

占部裕典（大学司法研究科教授）著

地方公共団体は、「地方分権一括法」「地方分権改革推進法」「地域主権改革一括法」等のもとで、地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を広く担うものとされ、ここ10年以上、国と地方の事務区分の再構成が進められてきている。しかし、このような事務権限の配分の見直しの両輪にあるべき地方の税財政改革は未だその実をあげているとはいえない。地方税法は、地方公共団体が自主的に超過課税の実施や法定外税の導入をできる仕組みを設けているが、このような現行の枠組みでは地方公共団体が課税自主権を十分に活用することは困難といわざるを得ない。このような問題意識のもとに、本書は、(1)憲法のもとで自治体課税権はどの範囲まで許容できるのか、(2)自治体課税権行使の枠法といわれている現行地方税法のもとで自治体課税権はどこまで存するのか、(3)自治体課税の行使は地方税法のもとでどのように制約されているのか、(4)現行地方税法のもとで税収確保に向けてどのような方策が可能であるのか（課税権・徴収権の効率的行使を含む）といった視点から、現在の、さらには今後の「地方税」に法的な視点（解釈論・立法論）から目を向けるものである。本書は、「憲法改正と地方財政権」「課税立法権をめぐる諸問題－法定外税からのアプローチ」「課税自主権の行使に伴う地方税条例主義の課題」をはじめとして全12章（392頁）で構成されている。

著者より

行路社
3,150円（税込）

メキシコ近代公教育におけるジェンダー・ポリティクス

松久玲子（大学言語文化教育研究センター教授／大学グローバル・スタディーズ研究科教授）著

本書は、メキシコにおいて近代公教育の枠組みが作られた19世紀末から1930年代までを対象とし、メキシコ革命前後の社会変革を経験した近代国家建設期における公教育を通じたジェンダー規範の再編過程を考察したものである。

近代国家による家父長制的女性支配の根底には、生殖への支配つまり人口問題が存在する。当時のメキシコ政府は、近代国家における国民の量的増加と質的向上、すなわち優良な国民を再生産することを国家的課題に据え、公教育を通じて近代国家が要請するジェンダー規範を再編しようとした。この近代的ジェンダー規範は、カトリック教会や社会主義運動、労働運動などのさまざまな権力関係のせめぎ合いの中で形成されたが、その過程で当事者である女性たちの姿は歴史の表舞台に現われることはほとんどなかった。

本書では、女性の数少ない専門職として教育に従事するフェミニストたちに着目した。彼女たちは、カトリック教会の伝統的規範から女性を解放するために、当時「科学」的知識と考えられた優生学に依拠し、近代国家と結びついた母性主義的規範形成を推進した。その過程で、自律的身体管理（避妊）や生殖の自己決定の権利を封印し、母親として近代国民国家に貢献する道を選択した。母性主義規範を推進したフェミニストたちの葛藤と戦略を明らかにし、ジェンダー規範の形成過程で作動したジェンダー・ポリティクスについて論じた。

著者より

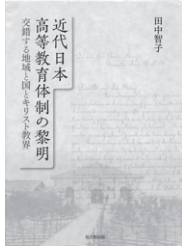
日本経済評論社
9,240円（税込）

日本の村落と主体形成
―協同と自治

庄司俊作（大学人文科学研究所教授）著

本書では、現在を含む近現代日本の村落（行政村を含む）を農村の主体形成との関連で分析している。村落というと、かつて社会科学全般で華の時代があった。だが、その取りあげ方は一面的でまた、重大なバイアスがかかっていた。近世成立の「むら」や「いえ」は近現代になってそんな簡単に消えてなくなるものか、村落の「しぶとく存続し機能する側面」を歴史的変化とともに明らかにすることが今求められているのではないか。かかる基本的問題意識から、研究史との関連でいうと現在の視点で近現代共同体史を書き直した。村落の多層性および協同と自治の主体形成に注目し、歴史の視点に立つ自治村落論と今日の共同体論・水利共同体論を総合する実証研究である。また筆者のこれまでの研究との関連では、農業・農村史や農地改革史、農政史の各研究において画竜点睛を欠いた村落史の岩盤に深くボーリングする研究である。3部構成、序章を含め全11章よりなる。第Ⅰ部では「近現代村落の重層性と基礎的共同体の移動」と題し近現代村落とその機能の重層化と、戦時期部落会の歴史的意義として基礎的共同体の移動、第Ⅱ部では「1930年代の町村と町村―村落関係」と題し現在の旧村とされる明治合併村の共同体化と、新たな町村―村落関係としての村議の村落代表制の確立、第Ⅲ部では「今日の協同・自治行政と共同体」と題し旧村単位の村おこしや集落営農の展開と、多様で重層的な共同体とその機能をそれぞれ解明した。

著者より



思文閣出版
7,350円（税込）

近代日本高等教育体制の黎明
―交錯する地域と国とキリスト教界

田中智子（大学人文科学研究所助教）著

19世紀後半、すなわち開化期の日本において、「官立学校」「公立学校」「私立学校」の境界は不明瞭であった。現在の学校教育法が示すような定義、設置者＝管理者＝経費負担者の原則もなかった。これを未成熟と評するよりは、多様な協同の選択肢がありえた時代と捉えてみたい。

各学校の年史編纂事業によって進展した結果、学校単位の縦割り視線から自由ではなかった従来の高等教育史研究の克服が目指される。フィールドを関西一円に設定し、「京大」そして「府立医大」「洛北高校」、何より「同志社」、さらには「神戸大」や「岡山大」などの歴史をも射程に入れ、全体を「地域史」「相互関係史」として再構成する。京大は神戸にあり、同志社に医学部があったかもしれない、といった意外な可能性を、実証的に提示する。

本書は、人文研のアメリカン・ボード宣教師文書研究班における研鑽の成果であり、同志社社史資料センター新島研究奨励金の助成を得て刊行された。新島襄やJ・C・ベリーといった、同志社史上の重要人物が登場する。しかし真の目的は、同志社人のための同志社史を描くことではなく、日本教育史、あるいは広く日本近代史にとっての同志社史の意義を示すことにある。扱われる事象には、国立大学法人の統廃合、あるいは道州制の提起、といった今日的動向を考えるヒントもつまっており、興味はつきない。

著者より

ナカニシヤ出版
3,990円（税込）

音楽が創る治療空間
―精神分析の関係理論とミュージックセラピィ

稲田雅美（女子大学学芸学部教授）著

本書は、精神分析の関係理論を通してミュージックセラピィの意義を論じ、さらに、精神科臨床における著者の実践から、言語世界と音楽の共通項を見出したものである。本書におけるミュージックセラピィの概念は、いわゆる「音楽療法」とは一線を画している。癒しの音楽を提供することやなじみの歌を集団でうたうといった営みはミュージックセラピィではない。ミュージックセラピィとは、言語の力を頼りに心的世界を構造化していく精神療法をモデルとして、音の力を頼りに、クライエントが自らの心模様を他者と共有できる音楽的な形に創り上げていくのを支える行為である。そこではセラピストは、言語と音楽、双方の潜在性と、その裏返しである危険性（自他を傷つける可能性）の狭間に立って、クライエントに寄り添う。

本書の第一部では、セラピストの機能がWinnicottおよびBionの母子関係理論における母親の機能に対応することや、「病いの語り」としての音楽表現が、セラピィ空間の中で文化的体験へと変容することについて論じている。第二部では、「シニフィアン」の概念を適用して、音楽と言語構造の関連を解明しつつ、クライエントをシニフィアンの連鎖に導き入れるためのセラピストの役割や、シニフィアンの漂いの中で生起する「機知」の自己治癒的側面について議論している。ミュージックセラピィという治療的行為は芸術的営為へと価値転換される、というのが総合的結論である。

著者より

晃洋書房
4,200円（税込）

ソフトウェア・ビジネス
―利用側と提供側の双方に立った複眼的研究

加藤敦（女子大現代社会学部教授）著

２００１年のＩＴ基本法から10年が経過した今日、我が国ソフトウェア・ビジネスはどう針路をとるべきだろうか。本書はこうした問題意識から、実務家出身の研究者である筆者が、取引費用論、資源ベース論、リアルオプションなどの理論的枠組みを用いて、ＩＴサービスの利用側と提供側の双方の視座にたって研究してきた軌跡を記したものである。

本書は大きく2部に分かれる。「基礎編　ソフトウェア・ビジネスの現在」では、ソフトウェア産業の人的資産、経営戦略を踏まえたＩＴ活用、受注ソフトウェアの請負構造、国際的なシステム開発体制など基本的事項を取り上げ、米国、中国などとの比較を通じ我が国ソフトウェア・ビジネスのアウトラインを示すように努めた。「研究編　未来に向けて」では、技術者・利用者の人的資産拡充のための組織条件、ＩＴベンチャーのリスクマネジメント、複雑なシステム開発におけるプロジェクト管理者の役割、中国ソフトウェア産業の発展と日中連携、ソフトウェア分業生産体制下での地域ソフトウェア産業の役割などを扱っている。

執筆を通じ筆者が重要性を再確認したのは、技術者・利用者の自己投資を促す組織的枠組みを作ること、並びに、為替・労務費・技術革新など不確実性が高まる中で戦略的柔軟性を構築することである。そして京都や沖縄・中国など実務家の友人達と共有するようになったのは、ソフトウェア・ビジネスの豊かな可能性と明日への夢である。

著者より

学文社
2,415円（税込）

食文化とおもてなし

山上徹（女子大学現代社会学部特任教授）著

本書を刊行した動機は、「日本人はいつ頃から食べ物に困らない国になったのであろうか。また、日本政府は日本料理をユネスコの世界無形文化遺産への登録を検討しているのは、なぜであろうか」との疑問からです。

本書では「文化」を縦糸とし、「おもてなし」を横糸に、食文化の体系化を試みました。食という視点から、具体的に京料理・茶の湯・年中行事・冠婚葬祭・宗教上のタブー等について考察しています。また、日本の丁重なるおもてなしというパフォーマンスの付加価値に関しても述べております。

今日、日本料理は世界的に貴重な食文化として認知されるに至っております。しかし、残念ながら、日本人自身が「食文化やおもてなし」という価値をあまり評価しておらず、特に、食事文化が継承されなくなり、失われつつあります。このような現象を単に嘆くだけではなく、むしろ日本の食文化を積極的に活用するべきです。本書では「食文化やおもてなし」が日本企業の競争優位性を発揮させる武器になるとの提案をしています。

著者より

文藝春秋
819円（税込）

五感で読む漢字

張莉（女子大学現代社会学部准教授）著

「五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）」に関わる文字を通して、古代中国人のリアルな感性をあぶりだすことが、本書のねらいである。中国には「字里人生（文字の中には人の生き様がある）」ということわざがあり、漢字の字源は遠い過去でありながら、現在の我々の心に通じるものがある。

一例を示そう。紀元前１３００年頃に誕生した甲骨文字は、王が戦争や農事などの近未来の吉凶を占うために創られた。例えば、「聴」は神の声を聴くことが原意であった。同意の「聖」は、文字内に耳を含んでおり、神の声を聴くことが出来る故に聖人の「聖」の意となる。かくして、「聴」・「聖」は耳目聡明の意味を有する。後に、「聴」が聴こうとする能動的な行為であるのに対して、「聞」は受動的に聞こえてくることを意味するようになる。ついには、受動的にきこえてくることと受動的ににおってくることの混同により、現代中国語では「聞」は「におう」の意となる。日本では、視聴率というのは、きくことの能動と受動の意味を古くから踏襲しているからに他ならない。そもそも「聞く」は「聞」字の原意であり、日本の方が中国より、漢字の原意をそのまま伝えている。

現代のパソコン文化に代表されるデジタル的な知性は、五感を生命の外に追いやってしまったという気がしてならない。漢字文化と歴史に通ずることによって、人間が人間本来の五感の楽しさを取り戻すための一助としたい。

著者より